

## 反捕鯨運動の非倫理性について

反捕鯨運動が自然科学的に間違いであることはしばしば指摘されていることであり、自然科学者の間では常識であるが、科学論争に敗れた結果、反捕鯨運動は捕鯨問題を倫理・思想の問題として取り上げようとしている。これについて戸惑いを感じ、あるいはこれを正義だと誤解している向きもありそうなので、反捕鯨運動の倫理的誤りを指摘しておく。倫理といっても、特定の宗教・文化的なスタンダードではない。以後の解説では、本来、こうした議論を心良しとしない原理主義者にもわかる論理展開を心がける。ただし、反捕鯨原理主義者が、この極めて丁寧かつ分かりやすい説明を納得することについてはいかなる期待を持っていない。一方、そうした宗教的原理主義者でない常識的な近代人には、彼らが何故こうした議論に納得したくないのかは十分理解できる内容となっていることを自負している。彼らが理解したくないと思うその精神的性向そのものが、現代における非倫理そのものであることを解くことがこの文章の目的である。

出発点は地球上の生物とそれが構成する生態系の理解である。地球上に生物の起源が単一であったか、複数あったのかはここでは問わない。進化説の妥当性を予め受け入れろというつもりもない。筆者自身は、創造説を、全く一般性のない（文化背景を共有していない人には全く理解不能と言う意味である。）原始的な宗教的信条・文化のグロテスクで滑稽な産物だと思っているが、ここでは、そうした他人が見たら滑稽な心情もそれが有害でない限り許容する。それは、無宗教者も含めた文化的寛容こそが、この論議において筆者が基準としている唯一の立場だからである。

どのような文化的・宗教的背景から世界理解をしたとしても、地球上の生物が相互に依存しあって存在するという現実を否定することはできない。仮に進化説的理解に立てば、生物の歴史は、地球上で様々な種が誕生して複雑化していく過程で、捕食―被捕食、競争、競合、依存、寄生、共生など、様々な種間の関係が生まれ、それぞれの生物がそのような関係性の中で種を維持しようとして変化してきたプロセスである。進化説的理解を前提にしないでこれは納得可能である。たとえば、キリストの天地創造説においてさえ、ヘビが登場しなければアダムとイブは知恵の果実を食べないし、果実を食べなければアダムとイブは知恵を身につけエデンの園を追われぬ。ヘビも果実も生物である。キリスト教的な神様でさえ、ヘビや果実という生物に依存しなければその宗教的な原理さえ作れない。ヘビやリンゴはさぞ迷惑しているだろう。それが単なる気まぐれであったとしても、神様はヘビや果実やアダムやイブを必要とした。これは皮肉ではなくて、彼らのテキスト（聖書）に書いてあることである。実際、旧約聖書や新約聖書等多くの宗教的なテキストには、人間が他の生物に依存して生きている姿が生き生きと描かれている。ここでは、キリスト教徒に敬意を表して、彼らにとってもっともわかりやすい例をあげる。キリストと 12 使徒で

構成される原始キリスト教団は漁業者集団である。これは、新約聖書を読めば明らかだ。原始キリスト教団が漁業者集団でないと主張する人がいたら、その人は聖書を読んだことがないということを意味する。キリストと 12 使徒はガリラヤ湖の魚という他の生物の生命に依存して生きていた。筆者はイエスの思想形成には、漁業者集団の指導者であったことが深く関係していると思っているが、それはそれとして、聖書にそういう「事実」が書かれているという現実をキリスト教徒は否定できないだろう。どうしてもわからない人は、キリストの第一の弟子であり、後にカトリック教会の初代ローマ教皇となるペテロの職業が何であったとテキスト（聖書）に書いてあるか確認すればよい。それでもわからなければ、その人はもはやキリスト教徒ではない。教科書を信じていないからである。しかし、キリスト教徒でなくなるということは、視野が広がることを意味し、それはそれで幸せなことである。

他の宗教でも他の生物に対する人間の依存を否定しているものはない。宗教とは本質的に、自分自身と世界（自分以外の者）との関係についての興味が生み出したものだからである。厳格な殺生戒を持つ宗教、たとえばジャイナ教のようなものをどう考えるかという疑問があるかもしれない。ジャイナ教を世界的にマイナーな原始宗教と考えてはいけぬ。信者の分布範囲はほとんどインドに限られ、インドの中でも信者の数は人口比で 1% に満たないが、インドの人口の大きさを考えると 450 万人もの人がその信者である。インドの宗教であるから、仏教やヒンドゥー教と同様に一つの人生観(ism)であり、ユダヤ・キリスト教的な意味での宗教(religion)ではないが、自己とそれを取り巻く宇宙の関係について徹底的に深い洞察を含んだ宗教である。インド独立の父ガンジーの非暴力・無抵抗主義はジャイナ教の影響であると言われている。また、環境論者の中にはジャイナ教に興味を持っている人も少なくない。ジャイナ教は厳しい戒律、特に不殺生の徹底で知られている。不殺生（アヒンサー）は解脱を目的とした出家者の修行のための 5 つの大誓戒の最初に挙げられている。これは極めて徹底したもので、動物を食べない・殺さないという程度の単なる菜食主義ではない。生き物に苦痛を与えることをしてはいけぬ。これは動物についてだけではない。ジャイナ教では無生物を含めて全ての存在に靈魂がやどり、その靈魂に苦痛を与えることは悪業を積むことになると思う。ジャイナ教の修行の目的は真の知識を得た勝利者（ジャイナ）として解脱し、輪廻転生の苦しみから抜け出すことである。不殺生は徹底しており、道を歩いて蟻を踏みつぶすことも避ける。無生物にも靈魂が宿るので、物質を所有することも悪業である。厳格に教えを守ろうとする裸行派のジャイナ教は着衣すら認めない。漁業は生物を捕獲する業であるからジャイナ教徒は職業として選択しない。農業も畑を耕し微生物を含む生物に苦痛を与えるので好ましい業ではない。生産に直接に関係することは生物と何らかの関係を作り、結果的に悪業を積むことになるので避ける。ジャイナ教徒の多くは商業に従事し、一般的に裕福である。たとえライオンに襲われることがあってもライオンと戦ってはならない。それはライオンに苦痛を与え悪業を積むことになるからである。ジャイナ教の出家者の修行の目的は、断食の末餓死することである。

生物を含めて存在する者すべてに苦痛を与えないという点において、矛盾がなく首尾一貫している。立派である。しかし、ジャイナ教はこれを絶対正義としているのではない。ジャイナ教は相対主義であり、絶対正義を口にすることを否定する。ある見方からすればこのようになると主張する。農業や漁業を否定しているのではない。裸行派のジャイナ教徒が、突然一般市民に襲いかかり裸にするなどという行為も行わない。輪廻転生の考え方からすれば、人はすでに前世において悪業を積んでいる、それを現世の善業によって打ち消さなければ解脱できない。最終的に餓死するにしても、解脱のために現世を生きなければならぬ。生きるためには、それを成り立たせている社会、農業や漁業、服を着て歩いている人も否定できない。独善であってはならない。人の嫌がることを口にして、他人の靈魂に苦痛を与えることをしない。他者にはその見方をすれば、そのようにする理由がある。彼らの現世的存在と論理一貫性の両立は相対主義によって可能になっている。彼らはこの世に神の正義を実現するために善業を行っているのではない。戒律として肉食（究極しては食べることを生きること）を戒めているジャイナ教であっても、現世において、人間社会が他の生物とのかかわり合いによって成り立っていることを理解し認めている。おそらく、人間が生物とのかかわって生きていることを原理的に否定している宗教はない。

生物と人間のかかわり合いは多面的である。家畜を飼育しこれを食すること、野生動物を捉えて様々な形で利用すること、介護犬等を含めて動物を使役に使うこと、動物をペットとして愛玩すること、生活の安全や産業のために野生動物をふくむさまざまな動物を管理すること、植物を栽培し食用とすること、園芸を楽しむこと、等々、こうした生物との関係があって人間の生活が成り立っている。生物を愛玩することと、これを食料のような形で利用することは明瞭に区別されるべきであるという主張があるかもしれない。しかし、ペット産業はペット用として売れ残った動物を大量に殺戮している。また、期待しない繁殖を防ぐために去勢等も施される。愛玩動物はこうした関係を人間との間で作り上げたことによって種を保存している。また、牛、豚、鶏等の食用の家畜も食べられるという人間との関係があって種を保っている。反対に人間もまた生物をさまざまに利用して生きている。

特定の生き物だけに利用や駆除が集中すれば、生態系のバランスが失われる。肉牛は食べられるための生物として作られているのだから、牛肉だけを食べろと主張することは生態学的に誤りである。1Kgの牛肉を生産するためには11Kgの穀物が使われる。穀物を大量に生産するためには肥料を投入しなければならない。施肥した肥料のすべてが作物に吸収されるわけではないから、余った窒素などは環境を汚染する。クジラや天然魚を漁獲しても穀物は消費されない。そういう視点からすれば、捕鯨や漁業等の天然資源利用派は環境にやさしい。もちろん、それらの資源を維持し、生態系を保全するためには、適切な漁獲可能量を守らなければならない。必要なのはバランスである。利用しなければならないとすれば、利用可能量を推定し、特定の生物に負荷がかからないように、様々な生物を利用しなければならない。

その一方で、人間はこうした関係そのものに不安を感じる。人間そのものが生物であり、死と死に伴う苦痛を恐れている。人間は関係性の動物であり、人間同士の関係があって人間の社会が成り立っている。高度なコミュニケーション能力は人間を最も特徴づけるものであり、進化説的に言えば、人間の進化とはコミュニケーション能力の発達である。コミュニケーション能力とは、相手の思考や感情を推測し、自らの思考や感情を相手に伝えることであり、その能力は他者に対する想像力と共感によって成り立っている。人は他人の死を自分のことのように恐れる。殺人は通常の間人間にとっては実行不可能な悪業である。それは、殺される他者の死への恐怖と苦痛を自分のことのように想像・共感できるからである。このような想像力や共感の能力は、人間以外の生物を対象とした時にも生ずる。程度の差こそあれ、人間は他の生き物を擬人化して理解しているからである。再び、ジャイナ教を例に挙げる。ジャイナ教では全てのものは輪廻転生を繰り返す。したがって、生き物は人間の靈魂の転生・生まれ変わりである。だから、その靈魂に苦痛を与えることは悪業なのである。この例でわかるように、人間以外の生物の死やその殺戮を人間が忌み嫌うのは、その生物を擬人化しているからである。同じ生物でも、植物より動物、同じ動物の中では脊椎動物、脊椎動物の中では魚よりも哺乳類、哺乳類の中でも霊長目の死に人間が苦痛を感じるのは、それがそれぞれの中で、より人間に近く擬人化しやすいからである。これには文化的な違いがある。生物学分類学が発達したのは近代であり、それ以前に人間は文化を持っていた。何が人に近いと感じるかは文化によって違いがある。有害昆虫、ミミズのような環形動物、水中の微小生物、細菌類等々、どこまでの生物に共感するかは人により文化により違う。したがって、民族ごとに利用可能な生物が異なる。特定の生物に利用が偏らないようにするには、全体としてバランスを取るしかないだろう。そういう意味では、ムスリム教徒はヒンズー教徒や他の民族に感謝しなければならない。他の民族が積極的に豚を食べるので、彼らが豚を食べないという戒律を守れるのである。同じ意味で、ヒンズー教徒は牛を食べる他の民族に感謝しなければならない。私たち日本人の多くは、芋虫や昆虫などを食べられない。昆虫食を行うラオスや北タイの人々を尊敬しなければならない。犬を食べる韓国、ベトナムその他の地域の人にも敬意を表さなければならない。食文化を含めて他の民族の文化に敬意を払いそれを尊重することは大切なことである。

ジャイナ教的に言えば、生物を所有したり利用したりすることは、その靈魂に苦痛を与えるので悪業である。しかし、意図的である否かを別として、生物を殺害しないで生きている人間はいない。人間と生物の関係とはそういうものであり、そこには絶対善も絶対悪も存在しない。知の勝利者（ジャイナ）として自ら解脱しなければならないという立場からすれば、避けるべき行為があるというにすぎない。しかし、生物利用に伴う不安や不快感は人間であれば避けられない。これは人間であることによって生ずる不安であり、ジャイナ教であれば業、キリスト教的には原罪。どのような言葉で表すにしても、人はこの不安から逃れたいと思う。これは人間であるからこそ生じる感情であり、ここまでは、自然な感情である。問題は、この不安から逃れるために何をするかである。

ジャイナ教徒であれば、出家して大誓戒を戒律として修行を積み解脱を目指すか、出家しないまでも戒律にしたがって善業を積む。これは、ジャイナ教が相対主義であり、前世までに蓄えた悪業を善業によって相殺したいと考えるからである。キリスト教徒においても行動としては変わらない。贖罪である。キリスト教において、「贖(あがなう)」は、教会に金品を献金することによって、奴隷の身を買戻してもらう(ローマ帝国に布教し、奴隷階層を中心に布教していったキリスト教の歴史を思い起させる。)、生贄を神にささげて許しを請う等々さまざまな意味に使われる。キリスト者ではない筆者には正確な理解が難しいが、ここで用いる贖罪の意味は、善行や金品を神または教会にささげて、自らの罪の許しを請うことである。こうした行為はキリスト教徒に広く見られ、そのこと自体に非倫理性はない。また、善行が、自らの行動を反省・悔いあらため、社会に有益なことをすることであれば大変に結構なことである。しかし、このキリスト教的善は、絶対神の定める絶対善である。いわば閉じた世界での善である。閉じていようが開いていようが、その善が自分たち以外の人間にとっても厚生を増すものであればよい。しかし、多くの場合、悪行を改め善行を行うには、苦痛をとめない、努力を必要とする。したがって、最も安易な善行が選ばれる。しばしば行われるのは、自分たちと生活習慣や価値観が異なる他者を攻撃することである。絶対神のもとでは異教徒は悪であり、悪を攻撃することは善行とされるからである。これならば、自らの行動を改める必要もなければ苦痛を伴わない。中世には、ムスリムに対する無意味な攻撃にすぎない十字軍の遠征が行われた。十字軍遠征のために行われた献金は自ら悔い改めることの代償として行われた善行である。以後ムスリムとキリスト教徒との対立が生まれ、多くの悲劇を生んでいる。9.11のニューヨーク国際貿易センターの悲劇の遠因は、中世に行われた善行としての献金である。ヨーロッパにおけるユダヤ教徒への迫害も、当時のキリスト教徒にしてみれば善行である。こうした行為は宗教的不寛容が原因であり、政教分離された近代国家では起こり得ないと考えられるのであればそれは誤りである。小さいざごぎはあった。それでも、第2次世界大戦以前、ヨーロッパにおいてユダヤ教徒とキリスト教徒は共存し、エルサレムでは、キリスト教徒、ユダヤ教徒、ムスリム教徒が共存していた。ホロコーストは20世紀の半ば、ユーゴスラビア紛争は20世紀の終わり、東チモールの独立は21世紀になってからであり、パレスチナ問題はいまだに解決していない。もちろん、これらの対立の原因のすべてが宗教対立にあるわけではない。経済や階層、政治的自由の問題がかかわっている。しかし、宗教的対立感情が問題解決を困難にしていることも事実である。むしろ、宗教はこうした紛争の正当化のために利用されているといえるかもしれない。宗教的儀式に参加し、宗教的正当性を与えられた後に、戦闘行為と言う殺戮行為に向かう兵士はムスリム兵士だけではない。現に、アメリカ軍には多くの「従軍宗教者」(この訳語の正しさについては疑問があるが、他に適切な日本語を思いつかない。)が存在し、兵士とともに戦闘に向かう。ベトナム戦争にも多くの従軍宗教者が参加し、ベトナム農民の殺戮という非人道的行為に正当性を与えた。つまり、政教分離の建前の中で、宗教と政治はお互いに依存関係にあり、宗教は政治に利用

されている。合衆国における選挙の主要な活動が宗教団体の取り込みであることから、このことは理解されるだろう。この文章では、結果的に、ユダヤ・キリスト教的世界観に否定的な表現が多くなってしまった。戦争機会の多い世界的な支配力が強い国にたまたまキリスト者が多いだけのことである。筆者には、特定の宗教を揶揄・嘲笑する意図はない。言いたかったことは、世界の紛争には多かれ少なかれ宗教紛争の要因が含まれ、紛争の口実に利用されているということである。

宗教と同様に、文化的な違いも政治に利用される。人の行為は環境や生態系の保全に悪影響を及ぼす行為が少なくない。車に乗ること、電気を使うこと、ジャイナ教徒に言わせれば、町を歩くことさえ悪業である（蟻など虫を踏みつぶしかねない。）。しかし、その悪業を行うことで生活や社会が成り立っている。それを否定すれば最終解脱の修行の場である現世の社会そのものが成り立たない。筆者が、反捕鯨運動を積極的に攻撃する立場を取る理由を学生に尋ねられた時にいつも使っている例がある。「君はディズニーランドに行ったことがあるか」、あるいは、「君のお父さんはゴルフをするか」という質問をまず返す。たいていの場合、何回かディズニーランドへ行ったことがある。中には大好きで良く行くと答える者もいる。家族にゴルフをしている者がいる学生も少なくない。そこで次の質問をする、「ディズニーランドは生態系と環境の破壊だとは考えないのか」、「ゴルフは明らかに環境破壊だが何故反対しないのか」という質問である。ディズニーランドが環境破壊であることは明瞭である。東京湾浦安の自然海岸を破壊し、ディズニーシーなる海の模倣物を作るなど、環境保全を馬鹿にしているとしか言いようがない。ゴルフ場が山野の環境と生態系を破壊することによって作られていることは一目瞭然であろう。しかし、ディズニーランドで劇薬の壘を投げる人もいなければ、ゴルフカートの前に身を投げてゴルフを阻止しようとする人もいない。それは、どのような理由であれ、ディズニーランドやゴルフを必要とする人がいて、その人たちは、私たちの社会の内部に存在し、私たちの社会を構成している人々だからである。ディズニーランドやゴルフを楽しむことによって、彼らの生活に楽しみが生まれ、他の悪行が行われなくて済んでいるとも言える。反捕鯨運動が盛んな、アメリカ・オーストラリア・ニュージーランドなどはゴルフも盛んで、ディズニーランド風レジャーランドも少なくない。それらの施設が盛んに攻撃されているとあまり聞いたことがない。ここでも「善行」は自らの社会内部の悪行を悔い改める方向には向かわず、他者への攻撃として表れるのである。実際、1972年の国連人間環境会議におけるアメリカによる捕鯨モラトリアム提言は、アメリカによるベトナムの枯葉剤散布の非倫理性に対する非難を避ける目的で行われた。まさに、自ら悔い改めることを避け、その代替のための善行として、異なる文化を持つ他者を攻撃するために行われたとする説がある。ただし、この説の妥当性を裏付けるものは今のところ公表された資料にはない。しかし、思えば、反捕鯨の中心的な国は、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド等、原住民の土地・生活・基本的人権を奪うことによって成立した国であり、彼らの畜産業は、彼らが

原住民から奪った広大な土地で行われている。彼らは彼らの言葉では原罪を背負っている。そうした怯えから、彼らの内部で何らかの意味のない行為が行われたとして、それが彼らに内部のみで行われていれば、単なる自慰的行為として許しても良い。しかし、自ら悔い改めることなく、他者を攻撃することによって、いわば自己正当化として国際社会でそれを行うことは倫理的に許されない。そのような行為は、将来の国際社会の合意形成を妨げるという意味で不見識かつ危険なことである。

ニュージーランドの首相であれ、オーストラリアの首相であれ、愚かな自国民からの人気取りのために反捕鯨を主張し、政治的なパフォーマンスを行うことは、無知という同情すべき弱者の欠陥としそれを許すとしても、国際社会における相互理解を妨げるという点から、その非倫理性は政治家として許されないものである。理解しておかなければならないのは、宗教や文化の中に閉じ込められた正義は、それだけでは普遍性を持たず、正義が普遍性を持つためには一旦相対化される必要があるということである。正しいことを行うことと、ある特定の価値観に従って、正しそうにふるまうこと（偽善）は全く異なる。それぞれの価値観・文化観に従って自らの行いを反省し、その価値観に従って自らの行為を律するならばそれはどんなに過激であっても良いことである。偽善はどんな宗教でもどんな文化でも、最も軽蔑に値する悪徳である。筆者は、シーシェパードの活動、グリーンピースの活動（彼らはシーシェパードとは一線を画すと明言しているが、上にのべたような理由でその偽善性については変わるところがない。）、反捕鯨運動を政治的に利用する発言、捕鯨反対を掲げる NGO 等に行う寄付行為は、偽善そのものであると結論する。以上が、反捕鯨運動が、生物学的・自然科学的に誤っているのみならず、非倫理的であることの説明である。

(20150105)